

飛鳥田一雄さんとともに 歩んだ社会党

——船橋成幸氏に聞く（下）



飛鳥田さんの防衛観・地方政治と国政

—— 質問が四つほどあるのですが、先に二つお尋ね致します。一つ目はないものねだりなのですが、飛鳥田さんの憲法9条とか自衛隊とか日米安保についての認識を教えてくださいというのが一つです。それから、もう一つは、60年代は革新首長で非常に社会党には勢いがあったのですが、国政レベルにおいてみますと社会党の議席は横ばいなし低迷ですね。池田・佐藤時代の社会党低迷の要因を分析していただきたいと思います。その原因というのは何だったのか。

船橋 飛鳥田さんは委員長を辞めてからも護憲連合の議長になられたぐらいですから、弁護士でもあり、憲法擁護派としてずっと活躍しました。それから、委員長を引退してからも厚木基地訴訟団の団長として基地反対運動の先頭に立たれた。それが飛鳥田さん生涯最後の活動だったわけです。それを見てもわかりますように、憲法と特に9条については固く守っていくという立場を一貫して貫いてこられました。

アメリカの総領事とは家族ぐるみのつきあいだったことは既に申しました。人間的なつきあいとしてはそうですが、例えば村雨橋戦車闘争のようにアメリカの、特に軍事面の動きについて、アメリカの軍部も引き退らざるを得ないような戦術を編み出して抵抗した。だから、飛鳥

田さんの場合はスローガンで叫ぶだけではなく、実際にアメリカ軍をへこます。そういう戦術を編み出して闘ったわけです。

例えば、横浜の緑区（現・青葉区）の荏田というところに米軍機ファントムが墜落、そして市民に死傷者が出た。ちょうど委員長になるかならないかでガタガタやっていたころです。そのとき、私は市長室にいたからよく覚えていますが、飛鳥田市長が一番先に言ったのは、「道路局長を呼べ」。道路局長が来ると、「市内の米軍基地の周りの道路を全部封鎖しろ」という。道路局長は、「いや、米軍基地の周りには国道だから市長は手が出せません」。「ああ、そうか。じゃあ、水道はどうだ？水道を止めてしまえ」。「いや、それは水道法違反になって後ろに手が回る」。「では、何か手はないか」。

それがきっかけになって、私が命じられて、虎ノ門の飛行会館に専門家がいるかもしれないというので行ってみたら、案の定いて、そこから東大の宮城雅子さんという航空法学の女性の教授がいらっしゃって、その人や、市内のいろいろな……。名前を忘れてしまいましたが、女の人の名前だけ覚えているんです（笑）。東海大学のエンジン工学の先生、それからお名前がちよっと出てこないのですが、市内居住の航空評論家の方など。そういう人が集まりました。ファントムを落として市民を殺したのだから、こらしめる方法はないかということで。専門家

を集めて侃々諤々の議論をして、落ち着いた結論が、航空機騒音防止条例を作ろうということです。確かスイスに、何時何分にどの方向に向けて飛行機が飛んだということをちゃんとレコードできる装置があったのです。それが1台何億円かする。それを購入して、基地周辺の小学校の屋上にいくつも配置する。基地の機能を妨げることになるんですね。その案が出されたら、塩田助役が、「面白い。やりましょう。金は何とかしましょう」と言ってくれたのです。それが77年12月の話です。

だけどその直後、市議会が空転した。なぜかというと、飛鳥田さんが突然、社会党委員長を受諾した。9月には金輪際受けませんと言ってにおいて、12月に受けてしまったわけです。それで大混乱になって市議会も2週間ほど空転した。市長が辞めるなら骨格予算以外の政策予算は全部認めないということで、せっかくの条例案も吹っ飛んでしまった。残念な結末でしたが、そんなふうには飛鳥田さんの発想そのものは、戦車闘争のときと同様、スローガンだけではなくて、実際にどれだけ相手をへこませられるか。その有効な手段を考えようと、つねに具体的、実践的だったわけです。

—— 村雨橋の闘争もそうですか。

船橋 ええ。村雨橋闘争もまさに飛鳥田さんの発想で、車両重量令違反ということを衝いて闘った。そのときは私も警察へ行って、木造の橋の上を重量制限違反のトラックが通ろうとするとき、村人が、危ない、危ないと止めたら、お巡りさんはその村人を捕まえるのかとか、こんな重大な国の問題を一署長の分際で左右できるのか、などと言って時間稼ぎをやり、マスコミのヘリが飛び回るまで頑張ったことがあります。まさにこれが飛鳥田流です。いかにして実効のある、有効な手立てを講ずるか。その点が、護憲ということを単なる抽象論に終わらせな

い、飛鳥田さんが選んだ方策の特徴でした。

二つ目、これは難しいですね。革新の低迷、これは社会党の派閥抗争が悪く影響したし、労働組合運動の低迷も影響したでしょうね。社会党内の派閥抗争は、東西冷戦の時代から思想的な分裂状況が、ずっと尾を引いていた。これがあって、いまの民主党ではありませんが、党内ガタガタじゃないかということで世間の評価を落とした点があると思います。それから、労働組合運動も特に70年代の後半から勢いが衰え、また労働戦線統一問題が出て以来、相対的に社会党の比重が低下していった。かつての「社会党・総評ブロック」の態勢が崩れ、しまいには社会党支持見直しの風潮も広がりましたね。

それから、いわゆる「成田三原則」で指摘された労組依存、議員党的体質、日常活動の不足という党の体質。これは60年代以前からも言い古されたことですが、そういう問題もある。飛鳥田さんは、そういう党の体質を改めるために「100万人の党」の課題を提起して、徹底的に議論してもらいたかったが、党の伝統と惰性の中で議論を深められなかった。これは委員長や私どもの指導性の問題もありますが、やはり目標の真意が理解されず、党の体質改善に失敗した。そして冷戦時代からずっと引きずってきた思想的・体質的な残渣を克服できない状態が続いた。これが大きかったと思います。

特に飛鳥田委員長時代の後半になると、社会主義協会と政構研（政権構想研究会）の対立が激化しました。社会主義協会もちょっと走り過ぎて、社会党をマルクス・レーニン主義の党にするとか、向坂さんも『社会主義』という雑誌に書いていましたし、最後には灰原茂雄さんとの対話でコミンフォルムを支持するとか、そういう方向へどンドン行く。そうすると、片一方は構造改革とか社会民主主義の党を鮮明にせよと言う。この分かれが結局、泥臭い派閥対立に

なってくる。そのことがメディアを通じて世間の評価に反映する。そういうことできちんと統一したリーダーシップが確立できなかった。それが非常に大きかったと思います。

—— では、あと二つですけれども、鳴海さんの話が出てきましたが、鳴海さんは横浜市政で特にどの分野で新しいアイデアを出されたのかということと、また国政に戻りますけれども、80年代でしたか。社公合意、いわゆる社公連合政権構想がありましたね。社公民とか「江公民」とかと揶揄されましたが、その形成過程について何か教えていただけることがあったらお願いします。

船橋 鳴海さんは一言で言えば政治顧問的な役割でした。私は鳴海さんより年上ですけれども、市の行政の場では鳴海さんに対して兄事する立場でした。私は都市科学研究室長なんて肩書はもらいましたけれども、この研究室それ自体が統一のテーマを持つのではなくて、6～7人の職員が1人1人みんな自分で勝手にテーマを決めて、自由に研究するということでした。私自身も時間が余るものですから、市長室に行っておしゃべりをしたり、有隣堂から「マルクス・エンゲルス全集」を1冊ずつ買ってきて、45巻ほとんどを読んだことがあります。『資本論』第3巻なんていうのはちょっと難しく、第2巻までは何とか読みこなしたのですが(笑)。ただ読んでいてマルクスの人間性の冷徹な一面にはちょっと違和感を覚えました。例えばエンゲルスの夫人が亡くなったときのマルクスの手紙など、エンゲルスが「僕の友人は皆、俗物の知人も含めて…僕が期待した以上の思いやりと友情を示してくれた。君は、冷静な思考様式の優越を主張する。…それならそれとしておこう！」(大月版30巻251頁)と憤慨した返事を書いていますね。それでもお金の無心にはちゃんと応えたり、終生たいへんな苦勞をして、

協力・協働してマルクスを援け、マルクスの死後、『資本論』の偉業を仕上げている。本当に温かい、いい人だと思います。

それから、80年代の社公連合政権構想を決めたときは、議事堂3階の委員長室で北山愛郎さんと山本政弘さんと下平正一さん、そういう方々に取り囲まれて、社公連合でやる以外ないと、強く言われました。山本さんはあまり強硬ではなかったが、北山さんが委員長に強く迫ったのが決め手になったと思います。

飛鳥田さんは本心を回顧録で書いていますけれども、本当は全野党でいきかかった。成田さんが自分に全野党路線を託した。それが成田さんの遺訓だと思っていたのです。だから、それをひっくり返すのは本意ではないという思いがあった。けれども現実にあそこで取り囲まれて、迫られたあげく、しぶしぶ承認したわけです。私は3階から下りていくエレベーターの中で委員長と2人きりになったものですから、「論言汗の如しですよ。委員長、もうたじろいではだめですよ」と言ったら、不機嫌な顔で、「わかってる」と言われましたね。(笑)

そういうことがあって、途端に代々木の共産党から猛烈な攻撃を受けました。もともと飛鳥田さんは横浜市長選挙でも社共でやりかかった。だけど、選対のほうで聞かないわけです。飛鳥田選対の側は、何も社会党公認だけで立派に当選できるのに、頭を下げて他党のお世話にまでなる必要はないということだった。そこで横浜の共産党が飛鳥田市政を批判する。それが下地にあって、今度は社公連合で合意したのだから、代々木の党が激しく攻撃するわけです。その社公合意の文書では、日常闘争では共産党と共闘をすると明記してあったのですが、おかないしにガンガン責められました。経過はそういうことです。

社会党と飛鳥田さんと私

—— 横浜市政のことですが、飛鳥田さんと、それから鳴海さんと飛鳥田さんが話している中では、船橋さんは社会党から派遣されて、社会党との関係を引き受けてもらっている人だというように鳴海さんがちょっと言ったような感じがするのですが、社会党と飛鳥田市長と船橋さんとの関係は公式にはどういうことになっているのですか。

船橋 私は労働局の副部長をやっていたときに、これは社会党の本部書記局としてはまったく異例ですが、半年ほど横浜市役所に出向したことがあります。社会党の書記局で出向という前例はない。それでも1万人市民集会を企画し、運営するために、飛鳥田さんが石橋書記長に電話をかけて、船橋を貸してくれということで私は出向したのです。その6ヵ月間、社会党本部では夜まで仕事をしましたけれども、市役所は5時になったら終わる。おかげで時間が余って車の免許を取りました（笑）。

そして、横浜の日教組から女性の先生を何人も派遣してもらって、文化体育館で市民集会をやりました。先ほど申し上げたように、直接民主主義論に基づく市民参加としては疑問もありますが、後援会の総会と思えば派手な大集会です。それをやりました。実のあることは区民会議のほうで地域ごとにやりました。

それ以前に、私は灰原さんと非常に仲がよかったのです。灰原さんが三鈺連事務局長のとき経営参加論というものを打ち出したことがあります。私は高野実さんのところに飛んで行って、高野さんが「経営の中に社会主義は無理ですよ」と感想を漏らしたのを「わかりました」と言ってガリ版のピラをつくって、ちょうど上野精養軒の日本間で三鈺連大会をやっていた。そこに「経営の中で社会主義はありえない」とか書いたチラシを全代議員の席にばらまいたこと

があります。そのあと、何年かして灰原さんに会ったら、「船橋さん、あのときのチラシを僕はまだ持っていますよ」と言っていました。

それから、まだ手許に保存しているのですが、灰原さんから手紙（64年6月16日付）が来て、「あなたの意見に全面的に同意見です」と書かれています。そんなこともあったのですが、私が組織局長を止めたときに、それが変わりました。私は組織局長のときも同時に地域の党支部長をやっていました。その支部に伊藤邦雄という国労の党員がいて、一緒にピラまきをやったり、市民組織を作ったりして活動していた。その伊藤君が、「船橋さん、僕はきょう初めて党員協で喧嘩をしたよ」と言うから、「なんで？」と聞いたら、灰原茂雄という人が党員協の学習会に来て、「組織局長を辞めた船橋が神奈川県本部に入りたがっているけど、絶対に阻止しろ」と話したから、「いや、船橋君はうちの支部長として一緒に這いずり回って活動している。そんな悪い人じゃないよ、と言って口論になった」というわけです。私はそれぐらい協会から嫌われてしまったわけです。

そのあとが神奈川県本部の大会です。これは普通なら3時か4時に終わるはずが、夜9時、10時までかかって、ワアワアもめている。ぼんやり聞いていると、私の県本部入りの問題で国労の党員と全通、全電通などの党員が対立して激しく論争している。その原因が分かっているから、そんな喧嘩はいやだよと言って、私が辞退したらスッと収まった。それが72年の3月です。そのあと私は7月まで職安に通いました。

その前の2月、組織局長を落選したときに、鳴海さんから、市長が心配しているから、市役所のほうで席を用意すると言ってくれたのですが、いや、私は党の基本組織で頑張りたいから県本部に入りたい。斉藤正という立派な書記長がいるから私は次長でいい。と言ったのですが、

神奈川県本部はそういう状態でだめになってしまった。その4ヵ月後、7月1日付で市役所に入れてくれた。つまり、拾われたわけです。だから、はじめから市役所に入るつもりではなかったのです。出向はしましたけれども。

—— そうすると、市の職員になったというか、ポストを与えられた時点で社会党との関係は公的にはないということですか？

船橋 だから、中央でも県でも党の役職はなくなりました。組織局長のときから、党のきわどい情勢には疎かったわけです。党内で派閥がどうなっているのか、まさか協会と政構研があんなにひどい喧嘩をやっているなんて、新聞では見ていましたけれども、その程度の知識しかなかった。まったくこんな派閥に関係のない男をそんなに嫌わなくもいだろうと、灰原さんに会ったら言おうと思ったのですが、会う機会がないままです。

指名中執・派閥などについて

—— 三つ質問させていただきたいのですが、まず一つは、飛鳥田委員長になったときに、当時中執のポストは全部選挙制で、委員長が自分で選べないのは困るというので、確か2名委員長指定のポストを作ってくれと言って作ったという話だったと思うのです。船橋さんのレジュメをいまずと拝見していて、82年4月12日に「指名中執は廃止と決定」と書いてありますが、これで結局、委員長指名中執はなくなってしまったのかどうかというのが1点目です。

それから、2点目は、飛鳥田委員長が横浜市長を辞めて衆議院に戻ってくるときに、東京1区で当選すれば関東全域に影響があるということで東京1区から出るようになったという話があったのですが、私がいろいろ個人的に聞いたり、あるいは組合の資料などを読むと、組合資料に書いてあったのは飛鳥田委員長が横浜市長

を辞めるときにも横浜で市議会が空転したりしていろいろゴタゴタやっていて、横浜で出るのは難しいだろうから、東京1区から出てもらおうということが書いてあったのです。あと個人的に聞いたのは、飛鳥田委員長が市長をやっている時期に、横浜はもう別の方が議員になっていて、また飛鳥田委員長が戻ってくると自分たちの選挙が危くなるから、どこか別のところから出てもらえないかというので東京1区から出るようになったという話があった。そういう事情があったのかどうかということが2点目です。

3点目は、森田実さんが山岸章委員長との対談で、『社会労働評論』という雑誌の編集長をやったときに森田実さんが書いたのは、結局、飛鳥田委員長が社会党に乗り込んだときはもう派閥対立で党が大変な状態だった。それを象徴するエピソードとして、結局、飛鳥田委員長は党本部に初めて来たときに党本部の書記の皆さんを集めて訓示を行った。その訓示の内容が三つあって、一つは、もう派閥対立はやめなさい。それから、8時半だから9時半だから忘れましたが、とにかく定時までには全員出勤してきなさい。それまで派閥対立で、みんなそっこのほうに熱中してしまって全然出勤してこないから、定時には出勤してきなさい。それから、完全に派閥対立に熱中して仕事が疎かになっているから机の上は全部片づけなさいという訓示を行うぐらいであったと書いてあったのですが、そういう話が本当にあったのかどうか。この三つを教えてくださいとありがたいのですけれども。

船橋 指名中執制度は、もともとは指名中執制度ではなくて、先ほど申し上げたように党の主要役員を委員長が指名する権限、人事権を与えてもらいたいという草案を、私が最初に文書で書いたのですが、飛鳥田さんが、「それは文書で書くのはちょっとまずい。口頭でいいんじ

ゃないか」と言うものですから、77年9月に「社会党問題に関する見解」という文書を発表したときに「委員長権限の強化」という抽象的な表現にとどめていたんです。

当時、細かいことを言いますけれども、市長室の隣に小部屋がありまして、そこに私と鳴海さんが潜んでいて、市長室で飛鳥田さんと成田さんがやり取りするのを聞いていたわけです。「拝みます、頼みます」「いや、だめです」というやり取りで際限がない。そこで、2人で飛び出して、「成田さん、ひどいじゃないですか。飛鳥田さんは9月に『社会党問題に関する見解』で、所信のほどは表明しているのに、それに対して具体的な答えもなしに、ただ拝みます、頼みますの一点張りで、こんなもの受けられるはずがありません」と言いました。そこから始まったわけです。人事権の問題、委員長公選の問題、これを「針の穴にラクダを通すほど難しい」と言った成田さんの頭にあったのは、じつは石橋さんです。石橋書記長が認めるはずがない。成田さんはそう思っていたのです。

ところが党本部に帰ったら、石橋さんが、委員長公選はやりたいならいいでしょうとあっさり受けた。人事権のほうは指名中執でいいじゃないか、2人ほど認めてやれということで、私と山花さんが指名中執に決まった。人事権を大幅に与えるよりは、1人か2人、しかも党本部を離れて何の影響もない船橋みたいな若造と、山花さんもまだ若手の弁護士あがりでしたからね。あの2人ならいいよ、というわけで、妥協の産物で決まったわけです。だから、石橋さんが機構改革委員会を預かって案を出したときに廃止した。クビにするわけにいかないから、私は政策審議会にまわったというわけです。

それから、選挙区の話ですね。それは横浜の実情を知らないからおっしゃるのです。78年の12月、飛鳥田さんが突然、社会党委員長を

受諾したときは、確かに横浜の仲間や支持者たちがみんな怒りました。9月の段階では、党を救うために仕方がないかと言っていた人でも、9月に「金輪際出ない」と宣言した飛鳥田さんが、12月になって一言の相談なしに委員長を受けたということで、みんな怒りましたよ。激しく憤慨しましたがけれども、血は水よりも濃いわけです。地付きの市議員、県議員、労組や町内会や婦人団体の人たち、そういう人たちが、やがて飛鳥田さんのことを心配するようになる。なにしろ市長を15年やって、きめ細かく面倒を見た肉親のような人がいっぱいいるわけです。

国会には、伊藤茂さんと大出俊さんが出ていましたけれども、飛鳥田さんを出したら1人落ちてしまうから、伊藤さんを参議院に回すか。それとも横浜に近いところ、川崎か東京2区か、これは大田区ですね。そちらでどうかとか、いろいろ横浜で心配してくれていたのです。伊藤さんも自分の親分みたいなものですから、覚悟しなくてはいけないかなという状況だったわけです。

しかし、名前を挙げるのはどうかと思いますが、宮之原選対委員長に、さっきの理屈で押しまくられて、委員長を引き受けるためにはそういう重荷も背負わなければいけないのか、となりました。東京1区の実情を知っていれば別ですが、それを甘く考えていた(笑)。そうしたら、歌舞伎町のお姉さんが投票するわけではないんですね。地主や商店の親父さんや工場長のような人しか投票しない選挙区で、それでも百人町や港区の一部なんかに多少は住宅があって人がいましたけれども。

東京1区の選挙に備えた飛鳥田さんの活動では、SPの人が音を上げるんです。戸別訪問の途中、吉野家に行って牛丼を食べるわけです。そうすると、SPが私に「あれはやめさせてく

ださい。警備ができません」と言ってくる(笑)。そんなこともあったりしながら、とにかく個人個人をつかまえていくという、まさにどぶ板選挙をやらざるを得ない。それで飛鳥田さんはかなり体を痛めたわけです。

それから、森田さんの言っていることは、私は知りません。そういうことを言ったかどうか覚えていないんです。ただ、派閥は収まっています。それどころか、委員長就任のときに確か社会主義協会規制委員会というものできていました。委員長就任前後に協会規制委員会できて、内部資料を提出しろということをして…。

—— それは終わったあとなんです。委員長就任前に決着がついていました。

船橋 そうですか。それでもまだ協会問題は尾を引いていました。派閥がなくなっていたわけではありません。そのあと1年か2年先になります。まだ東京都本部の分裂問題がありました。協会員を全部除名しろという主張があって、そのときに『月刊労働評論』で山岸章全電通書記長と横路孝弘、今の議長です。このお2人が私に協会を追い出せと要求する(笑)。私もどちらかという反協会なのですが、しかし党を分裂させることはできないということで、激しくやり取りする。その論争の記録が、たしか『月刊労働評論』に残っていますから、派閥問題が解消していたということはありません。横路、山岸のお2人ともいまは仲良くやっていますけれども、当時は私が協会を擁護しているというので、思わぬ攻撃をお2人から受けたことがあります。

—— ありがとうございます。ちょっと最後に確認だけ、82年の4月に指名中執制度廃止になったあと、また、中央執行委員会で今度は全部選挙制に戻ってしまったわけですか。

船橋 そうです。

飛鳥田さんと市民主義

—— 鳴海さんと飛鳥田さんの対談がありまして、それで非常に印象的だったのは、鳴海さんはどちらかという松下山圭一さんのように市民主義というか、新住民、横浜都民みたいな新しい人たちが基盤になる。それに対して飛鳥田さんは、さっきおっしゃったようにエゴが解消されればすむような人間が大部分で、もともといた在住の人たちも、もっと大事にしなければいけないみたいなことを言っていますね。そうすると飛鳥田市政を支持した社会層はどういうふうになっていたのですか、最初から最後まで。

船橋 まず、「市長と市民の会」というものがありまして、この会長は自民党員でした。町内会長はほとんど自民党支持者が多かったですね。自治会長と町内会長は似たようなものですが、だいたい自治会と称しているのは新住民、新市民が多いのです。そこにはわりと革新的な人が多い。しかし、この人たちは政治的にはあまり動かない。政治的に地域で根を下ろしている人には、どちらかという保守系が多い。

これはびっくりしたことがあるのですが、横浜の一番端の緑区へ行ったとき、緑区長が、「うちの町内会長は徳川時代の庄屋のつながりで、いまだに続いていますよ」と言うわけです。それぐらい保守的な層が地域の有力者なんです。

相模原で私は市長選挙の事務長をやったことがあります。相模原で、隣の家はまだ200年、うちは300年、500年だといって自慢する。そういう土地柄があるのです。私も実際現地を歩いてみてびっくりしました。だから、飛鳥田さんの支持層というのは保守系を含めて、革新的な層はもちろんですけれども、しかし、かなり広範に保守系を含める。でなければ、あれだけの票を取って当選できません。

そこで私の反省があるのです。江田三郎さんが社公民政権路線を唱えたときに、私は以前、江田さんと言い争って、私と山岸章、森永永悦、福田勝の4人が連名で、江田派からの自立をめざす動きをしたことがあります。伊豆の伊東に全国各地から26人の構革派の活動家を集めて会議をやった。その理由は、社公民が「江公民」と言われているじゃないか。私たちは民社を政権構想の中に入れるのは大反対ということでした。なぜか、私は当時、長崎造船労組の分裂とか、石播造船や広島造船、日産プリンス労組での分裂問題に取り組んでいました。労働局で「全造船の旗を守れ」とか、分裂阻止の闘争指導をしていた。ところが組織分裂の後ろに必ず民社党がいる。そんな分裂主義者と政権を組めるわけがない、というのが私どもの考え方で、それで江田三郎さんに食ってかかって、構革派活動家の自立だなんて唱えたわけです。

しかし、横浜市役所へ入ってみると、行政、飛鳥田体制には保守系も含めて安定的な基盤が構築されている。それを見て、江田さんが言っていたのはこのことか。そういう思いがして、江田さんに申し訳ないことをしたと気づきました。それで、77年の春に学士会館で江田さんにお目にかかって、「若気の至りで申し訳なかった。勘弁してください」と頭を下げたことがあるんです。だけど、そのあと間もなく江田さんが亡くなられて、私の生涯、痛恨の思いが残りましたけれども……。とにかく私は、横浜市役所へ行って行政権力の実態に関わって、初めてそういうことが分かったということです。

—— いまのお話だと、例えば民社は困るけれども、保守系と組んだほうがましだという話にはならないんですか。

船橋 いや、それは違います。いま言ったように「市長と市民の会」の主要な幹部の中には保守系、公然たる自民党员とかいます。だが市

議会は違うのです。市議会は党派別で構成されていますから、党派対立はあるわけです。だから、市長と市民の会の初代会長、北村清之助さんは自民党支持者だけれども個人として参加している。個人がたまたま自民党系だったというだけであって、別に党派的なしばりがあるわけではない。そこは区別されています。市議会では、先ほど申し上げたように1万人市民集会を4回も否決した。毎年1回ずつ否決して、4年間否決しっぱなしだったというように党派対立は厳しいのです。ただ、町内会長とかいうのは、個人として昔からのつながりで自民党に投票していたり、自民党の選挙運動に参加しているということであって、そこは違うのです。

社公合意補足

—— 先ほど社公合意で山本政弘と北山愛郎さんと下平さん、山本政弘はあまり強くは言わなかったというお話でしたが、いちおう山本政弘は社会主義協会で、北山さんも下平さんも社研だったと思うのです。そうすると、どちらかというとな野党路線派だったと思うのです。それがどうしてその3人が飛鳥田さんにそういうふうに迫ったのか。そのへんの事情というか、もう少しここを正確に、これはいつとかちょっと聞き逃したのですが、いつですか。

船橋 たしか80年1月です。

—— それはどこですか？

船橋 衆議院の社会党委員長室というのが3階にあったんですが、その部屋で、絵が浮かんでくるぐらいはつきり覚えていますけれども、ダーッと囲まれて、みんなに言われたわけです。飛鳥田さんは困った顔をして、しぶしぶOKした。

—— そうですか。私たちは知っている限りでは、山本政弘さんがそういうところに入っていて、そういうことを主張するというのはちょ

っと、あとの山本さんだったらわかりますけれども、その当時はもうちょっと……。

船橋 山本さんは、発言はほとんどしなかったけれども、少なくとも同席はしていました、だから飛鳥田さんから見れば、全員が迫ってきたという感じです。ただ、言っておきますけれども、飛鳥田さんは北山さんが社研だとか、山本さんが協会だとか、そういう目では見ていなかったし、そういうつきあい方はしていないんです。みんな人間同士、友人同士、仲間同士という感じでつきあっていて、派閥のフィルターをかけて人を見るということはあの人はまったく不思議なぐらいやらない人でした。それがなんていうかな。ちょっと説明しにくいんですけどもね。

共産党との関係

—— 私もその当時の社研の保守派は、ちょっとはつきり知らないのですけれども、社会主義協会は少なくとも全野党路線でやっていたわけですから、ちょっとそのへんが。山本さんがそこに入っているというのがね。

船橋 これは想像ですけども、山本さんにしてみれば、党の大勢がそうなっているのだから、そこで頑張ったら飛鳥田委員長が孤立してしまう。ここは大勢でしょうがないんじゃないかという思いだったのではないかと思います。

—— 飛鳥田さんはその出自というか、要するにもともと労農党系列ですよ。

船橋 はい。労農党員だったことはありませんが、社会党の最左派でした。

—— 死ぬるときも左派で死にたいと言う。そういう点で言えば、左派的な心情と立場を持ち続けてきた方だと思うのですが、この社公合意で当時、共産党との関係が決定的に悪化するわけですよ。それを後ほどどういうふうに総括というか、感想みたいなものを述べられたこと

はあるのでしょうか。

船橋 いや、これは観念的な言い方をすると、おれは反共ではないよと言うのですが、共産党からバンバン攻撃されるわけですから、これは横浜時代からそうなんです。社会党で選挙共闘を拒否する。そうすると、社会党がけしからんだけではなく、飛鳥田もけしからんと言って攻撃されるわけです。そうすると、そういう具体的な場合は反論しましたね。ただ、表立って共産党批判をやるということはほとんどなかったです。

これは共産党だけではなくて、宮崎さんという人が新貨物線問題で激しく飛鳥田攻撃をやってきたときも、宮崎ってなかなか純な人だと言って、人柄を褒めたりするので、ちょっと驚いたことがあります。「あの人はなかなか切れ者だし、純粋な人だ」と言う。市長室を占拠されてですよ。最後には助役が怒って警察を入れて排除しちゃった。それぐらい敵対した人でも、人間としてはいい人だと言う。そういう感性というか、感覚の持ち主、やっぱりちょっと変わってましたね。普通なら派閥的に対立すれば、人格的な批判までやるのですが、絶対にそれはやらなかった。

補 足

—— 飛鳥田さんは、生まれはどちらですか。

船橋 生まれは横浜の磯子です。しかもあれだけ長い間、市長もやり、代議士もやっていたながら、古ぼけた小さな借家住まいを終生つづけました。

—— 一私人としては江戸っ子的な感じがするんだけど。

船橋 江戸っ子ではなくて、先祖は奈良のほうだとか言っていたな。お墓は厚木にあります。父親は横浜の市会議長をやったり、これまた珍

しい経歴ですけれども、検察庁の検事出身です。それで市会議長もやって、行政と政治と両方を経験した。だから、考えてみたら、飛鳥田さんもそんなんですね。

—— そういう政治的な背景、基盤はあったということですね。

船橋 ええ。もともと戦後の滑り出しはBC級戦犯の弁護士ですから。

—— きょうは船橋さんご自身のことではなくて、船橋さんと飛鳥田さんとの関係、まさにその関係のところ、主題が置かれているので、その線に沿って一つだけ、船橋さんの初発の原点である労農党の部分、いわゆる後の社会党の一番左の部分、それから、きょう教えていただいた飛鳥田さんが黒田さんから破門にされる安打同のところで、飛鳥田さんも初発の部分で同じところにいる。そういう初発の部分で思想的、あるいは組織的に左か右かということからちょっと一歩下ってみて、船橋さんご自身も海員組合の中で非常に民主主義というものを重視される議論を実際に展開された。それから、飛鳥田さんご自身も自分の初心を貫かれる中で、差しで飲まれたときに、「僕は間違っていないよな」と。そういう点では形式民主主義ではなく、お二人とも直接民主主義というところにこだわりがあるのかなと思います。人間的な重なりはもちろんあったでしょうけれども、直接民主主義というところでの重なり合いはどうだったのでしょうか。

船橋 それはおっしゃる通りで、私が飛鳥田

さんにまず人間的に惚れました。そして、次に理論的に飛鳥田さんの直接民主主義論に非常に得心しました。それから、これは時間があればお話しするつもりでしたが、海員組合というのは全国唯一と言っていい産業別単一組織です。その中で私は杉山善太郎さんという後に参議院議員になった新潟の海員組合の支部長と組んで、それから海上統一委員会という地下組織にも加入して、組合民主化運動をやったのですが、そのときにまさにおっしゃるように民主主義擁護に徹するというのが、私自身の、いわば原点です。ちょっと簡単に説明しましょう。

海員組合では専従の執行部員が代議員の7～8割を占めて大会をやっていました。会社の社員が集まって株主総会をやるようなものです。だから、どんなことでも通るわけです。再軍備も単独講和も、総評脱退もすべて賛成、何でも通るのです。これは組合に民主主義がないからだとは思っていました。というのは、沖の仲間、普通の一般の組合員は代議員になれない。決議機関に参加できない。決議機関を執行部員が占めていた。産業別単一組織ですから、職種別最低賃金制度みたいに非常に強力で、しかもリーズナブルなシステムを提起することもできる。しかし、反面を見ると、執行部が思うままに牛耳れる。この一面を活かし、一面を正すために若いころから私は行動してきました。それはまさに飛鳥田さんとも通底するところがあったのではないかと。そういう思いがあります。

—— どうもありがとうございました。(完)